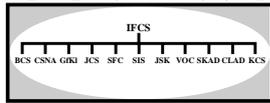


日本分類学会会報



JCS
JAPANESE
CLASSIFICATION
SOCIETY
NEWS

No. 25

2002. 6.

「国際分類学会連合の会計担当を終えて」

林 篤裕

1997年から2001年にかけて、国際分類学会連合(International Federation of Classification Society, IFCS)の会計を担当させてもらった。ニュースレターの先頭に掲載する内容としてふさわしいかは甚だ疑問だが、学会運営と言う側面から今回の私の経験を書かせてもらうことにする。

突然の電話から始まった。1996年も押し迫った夕刻、所用に間に合うようにと研究室を片付けている最中に、それは林知己夫先生からであった。何でもIFCSの会計(Treasurer)を引き受けるようにとのこと。同じ年の3月にIFCS-96を神戸で開催したこの手伝いをさせていただいていたので、この団体の概要は解っていたものの、会議開催のお手伝いと、国際学会事務局のお手伝いとは明らかに濃度が異なるだけに、私には荷が重すぎるところではなく背負えないと感じ、何とか再考してもらうようお願いしたのだが、聞き入れてもらえず結局、年が明けた1月にお受けすることにした。ちなみにこの1月中旬に行われた大学入試センター試験は、私にとってセンター着任後始めて迎えた試験であったのだが、現役生と浪人生で平均点差が開いた教科があったために、以後「へいく入試(平成9年度入試)」と言うニックネームで呼ばれることになるちょっとやっかいな入試でもあった。このようなダブルパンチで、大変なところへ来てしまったなぁと感じたように記憶している。

まずは、前任の Jacqueline J. Meulman 先生(オランダ)と連絡を取り、相談の結果、米ドルで管理することにし、そのための外貨預金口座を安全そうなある都市銀行に開設した。5月には送金があり、前後して会計書類もドサッと送ってこられて、私の担当がスタートした。会計の主な仕事は、傘下学会(任期終了時点で12団体)から年会費を徴収することと、会計報告書を作成し、Council Meetingで説明すること、そして、学会賞副賞に関する準備と配布である。

連絡はほとんど電子メールで行われるが、日頃、英語のメールなどというものを書き付けていなかったため、最初はいろいろと悩み、「外人はどうしても理解し難い文体で書くのか」と不思議にも感じ

目次

・巻頭言「国際分類学会連合の会計担当を終えて」林 篤裕	1
・総会記録	2
・運営委員会記録	3
・幹事会記録	4
・研究報告会記録	7
・統計関連学会連合大会連絡委員会報告	9
・関連学会活動	10
・IFCS(国際分類学会連合)関連	10
・日本学術会議関連報告	10
・国際会議開催情報	12
・事務局から	12

たが、そのうちに「意図が間違えられずに伝えられればそれで良いや」と半分開き直って書くようになった頃から、気楽に連絡を取り合えるようになったと思う。

任期後のことも考え、自分の行った作業内容が他人にも振り返り易いように時系列的に記録に残すようにし、また、会計報告書の TeX フォーマットを作成したり、一般会計用と学会賞用に口座を分割する(それまでは1つで管理していた)等、後任の方が理解しやすいように心掛けたつもりである。なお、次期の Tae Rim Lee 先生(韓国)には、紙媒体だけではなく、電子媒体も含めて送付し、2001年夏の ISI 会場で最終的な引き継ぎを行い、私の手を離れていった。

2回の Council Meeting (98年 Rome, 00年 Namur)に参加して感じたことは、事前調整を全く行わないことがままあることである。Secretary が事前に準備した式次第があるのだが、初耳の事項もその場で提案されるので、そのたびに議論が白熱することも少なからずあった。日本的な「根回し」が良いとは言わないが、状況の相互理解なしに重い議題が進むわけがないのも事実で、その多くが継続審議になってしまったことからすると、「根回し技術」を輸出しても良さそうにも感じた。

また、学会賞副賞の持参についても困った。「副賞は現金であるべき」という考えも解らないではないが、しかし、会計としては不案内な国に多額の現金を携行して訪問する必要があるわけで事故に遭遇したらどうなるのだろうとふと頭をよぎることもあった。受賞者も副賞をそのままホテル等の支払いに充てるようなことはないであろうから、この面でも危険が伴うわけで、国内学会ならいざ知らず、国際

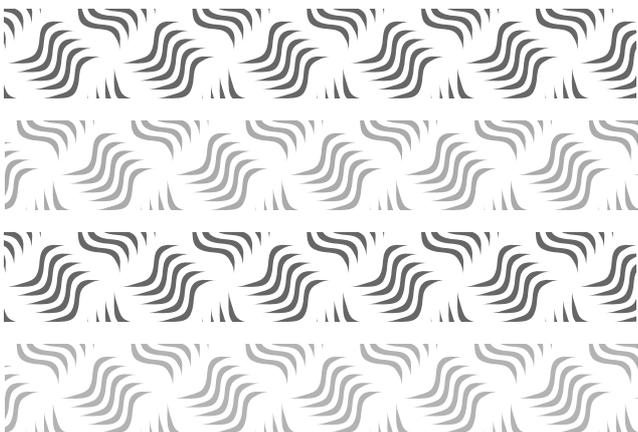
学会の副賞は、銀行間送金か小切手が導入されることを願っている。

その他には、事務局の一員として活動していて、学会の運営には核になる複数の人材が必要であることも再認識した。各学会代表委員が熱心なのは勿論だが、Hans-Hermann Bock 先生(ドイツ)は連合設立時からいろいろなルール作りと運営に尽力されている姿が印象的であったし、Secretary の David Banks 先生(アメリカ)は、滅茶苦茶陽気で、しかも事務能力にも長けていて活動的で、相棒(と言うと失礼なのだが)として、大いに助けてもらった。

辛いこともなくはなかったが、楽しかったことはるかに上回っていた。世界の著名な先生方と知り合える機会になったことは大いに収穫であった。特筆すべきは、Rome の Council Meeting 後の夕食会で、コロセウム近くの家屋の屋上から、少し暖かい風に吹かれながら眺める360度のパノラマはそれはすばらしく、紅に染まった空の中を赤い真ん丸の太陽が静かに Rome の市街地に落ちていく情景は深く印象に残っている。

約5年を振り返って、それぞれの場面が走馬灯のようによみがえってくる。その間、多くの方のご支援とご協力をいただいた。上記に挙げた先生方以外にも、日本分類学会の代表委員であった大隅昇先生には書類の作り方等いろいろと相談に乗っていただいた。また、98年は私が在外研究員として10ヶ月間、アメリカとスイスに滞在していたのだが、その間職場に届く各種書類の整理や銀行業務の遂行に対して事務補佐員の方々の協力が有ったことも記しておきたい。そして何より、このようなチャンスを与えてくださった林知己夫先生にお礼を述べないではいられない。ご協力いただいた多くの方々に感謝の意を表すると共に、今回の経験を国内外での学会活動の一助としたいと思う。どうもありがとうございました。

(大学入試センター 研究開発部 助教授)



総会記録

平成13年度総会議事録

日時：平成13年12月22日(土) 17:30-18:00

場所：統計数理研究所講堂

出席者：18名、委任状43名

1. 会長挨拶
2. 議長選出
佐藤 義治氏(北海道大学)を議長に選出した。

以下の各事項について、林幹事長より報告があった。いずれの事項も全会一致で承認された。

3. 平成12年度事業報告ならびに決算報告
- 3.1 平成12年度事業報告
- 1) 平成13・14年度役員選挙
選挙管理委員 馬場 康維、土屋 隆裕
会長 大隅 昇
会計幹事 上田 尚一、吉野 諒三
運営委員(五十音順、20名)
岩坪 秀一、大隅 昇、岡太 彬訓、後藤 昌司、杉山 明子、田中 豊、高倉 節子、垂水 共之、土屋 隆裕、土井 聖陽、馬場 康維、林 篤裕、林 知己夫、林 文、水田 正弘、村上 征勝、村田 磨理子、矢島 敬二、柳井 晴夫、吉野 諒三
幹事長 林 文
庶務担当幹事 今泉 忠、清水 信夫
広報担当幹事 村田 磨理子
- 2) 第16回通常総会の開催
平成12年12月9日(土) 統計数理研究所にて
出席者12名、委任状40通
- 3) 第17回研究報告会の開催
平成12年12月9日(土) 統計数理研究所にて
特別講演「電子的データ取得法とインターネット調査のあり方 - 実験調査にみるWeb調査の実状 - 大隅 昇「コンピュータ利用による電子的調査情報収集法」
吉村 宰「インターネット調査にみられる回答者像」
一般発表 9件
出席者：会員22名、非会員16名
- 4) シンポジウムの開催(行動計量学会との共催)
平成12年12月8日(金) 統計数理研究所にて
「テキスト型データ等の取得から活用まで」
- 5) 会報の発行
JCS 会報第23号の発行
IFCS Newsletter No.19, 20の印刷、配布
- 6) 運営委員会の開催

郵便、ファックス、電子メールなどの電子メディアを活用して書面による開催とした。

国際会議の後援（平成12年6月）

総会議題（平成12年12月）

7) 幹事会の開催

電子メールなどの電子メディアを活用して、次の事項に関して随時開催し打ち合わせを行った。

共催シンポジウムの開催

第17回研究報告会開催

平成11・12年度第2回運営委員会開催

平成12年度総会開催

国際会議の協賛・後援

平成13・14年度役員選挙

8) 広報活動

広報担当幹事が担当し、学会活動報告、計画、他学会や国際会議のホームページへのリンク作業等を通じて、広報活動を行った。

また、国立情報学研究所の情報発信サービスの説明会に参加し、利用可能かどうかを検討した。

9) 国際分類学会(IFCS)への協力

2000年度分担金を負担した。

3.2 平成12年度決算報告

会計幹事の方2名の監査結果を頂いた旨を事務局より説明した。

4. 平成13年度事業計画ならびに予算

4.1 平成13年度事業計画

1) 第17回通常総会の開催

平成13年12月22日(土) 統計数理研究所にて

2) 第18回研究報告会の開催

平成13年12月22日(土) 統計数理研究所にて

3) 他学会との共催

i) 計量心理学会国際会議(IMPS-2001 International Meetings of the Psychometric Society) 共催 2001年7月15日-7月19日

ii) 国際会議「計算機統計学の最近の潮流と医学・生物学への応用」(ICNCB International conference on New Trends in Computational Statistics with Biomedical Applications)(2001年に韓国で開催された国際統計協会大会のサテライト・ミーティング)協賛
2001年8月30日-9月1日

iii) チュートリアルセミナー(日本行動計量学会との共催) 2001年11月10日
「双対尺度法概説」講師:西里 静彦(トロント大)

4) 会報の発行

JCS会報 No.24の発行

I F C S Newsletter No. 21, 22 の印刷、配布

5) 運営委員会の開催

郵便、電子メールなどを用いて開催する。

6) 幹事会の開催

電子メールにより、必要に応じて連絡を取り、審議する。

7) Webサーバー関係

広報担当幹事が担当して、学会活動の報告、計画を掲載する。

8) 国際分類学会(IFCS)に協力

2001年度分担金を負担する。

9) IFCS-2002に関連して

若手研究者向け旅費給付補助(TAP)の公募

10) 他学会との交流

統計関連学会連合大会連絡委員会に参加する。

4.2 平成13年度予算案

別紙の予算案を参照。

5. 新入会員、退会者報告

平成13年4月より11月までの入会者 1名、退会者 5名。

6. 今後の学会運営について

1) 統計関連学会連合大会連絡委員会など、他学会との協力の推進連絡会議事録の報告を踏まえて、平成14年度の大会開催時期をどう調整するかを検討が必要

2) 他学会とシンポジウムなどの共催

3) 学会事務処理の効率化

入会申込書、設立趣意書等の学会紹介・パブリシティ情報の改訂

4) その他

運営委員会記録

平成13・14年度第2回運営委員会

日時: 平成13年9月26日

場所: 書面による

出席者(回答者): 岩坪 秀一、大隅 昇、岡太 彬訓、後藤 昌司、杉山 明子、高倉 節子、土屋 隆裕、土井 聖陽、馬場 康維、林 篤裕、林 文、水田 正弘、村上 征勝、村田 磨理子、矢島 敬二、柳井 晴夫、吉野 諒三(以上17名)

次の議題について、賛成17名で承認された。

議題: チュートリアルセミナーの共催となることについて

平成13・14年第3回運営委員会

日時：平成13年12月18日

場所：書面による

出席者（回答者）：今泉 忠、大隅 昇、岡太 彬訓、後藤 昌司、杉山 明子、高倉 節子、田中 豊、土屋 隆裕、土井 聖陽、林 篤裕、林 知己夫、林 文、水田 正弘、村田 磨理子、矢島 敬二、柳井 晴夫、吉野 諒三（以上17名）

次の議題について、賛成17名で承認された。

議題：

1. 平成13年度年次計画（主要な事項について）
平成13年度総会議題
内容：平成12年度事業報告（案）ならびに決算報告（案）について
平成13年度事業計画（案）ならびに予算（案）について
その他

平成13・14年度第4回運営委員会

日時：平成14年5月1日

場所：書面による

出席者（回答者）：今泉 忠、大隅 昇、岡太 彬訓、後藤 昌司、高倉 節子、田中 豊、土屋 隆裕、土井 聖陽、林 篤裕、林 知己夫、林 文、水田 正弘、村上 征勝、村田 磨理子、矢島 敬二、吉野 諒三（以上16名）

次の議題について、賛成16名で承認された。

議題：

1. 日本分類学会の年次計画
2. 連合大会における「市民講演会の後援団体」となること

幹事会記録

平成13年度幹事会報告

下記の各運営委員会前の会議および随時電子メール、電話等により打ち合わせを行った。

1. 平成13・14年度役員選挙
2. 平成13・14年度第1回運営委員会開催
3. 平成13年度年次計画
(1) 総会および研究報告会開催
(2) シンポジウム開催
4. 平成12年度会計監査
5. 統計関連学会連合大会連絡委員会の設置に伴う分類学会の参加について
6. チュートリアルセミナーの共催となることについて
7. 会報発行

電子図書館サービスの検討

平成14年2月27日に情報学研究所で開催された「平成13年度電子図書館サービス説明会」に、清水庶務担当幹事が参加した。電子図書館サービスへ参加については、幹事会で引き続き検討する。

平成12年度決算書

平成13年3月31日現在

収入の部

科目	細目	予算額（単位円）	決算額（単位円）
前年度繰入金		372,399	372,399
会費収入	会費小計	602,000	567,000
	平成12年度分正会員	(324,000)	(330,000)
	平成12年度分賛助会員	(120,000)	(60,000)
	平成11年度分までの未納分	(108,000)	(152,000)
	新入会員	(30,000)	(15,000)
	入会金	(20,000)	(10,000)
雑収入	小計	95,000	58,368
	予稿集売り上げ	(10,000)	(13,500)
	大会・シンポジウム参加費（含報告集代金）	(60,000)	(42,000)
	広告掲載料	(25,000)	0
	利息・その他		(2,868)
計		1,069,399	997,767

平成12年度決算書

平成13年3月31日現在

支出の部

科目	細目	予算額 (単位円)	決算額 (単位円)
経常運営関係費	小計	430,000	273,050
	会報印刷代 (JCS会報)	(270,000)	(158,550)
	会報印刷代 (IFCS会報)	(100,000)	(68,250)
	連絡用印刷費 (葉書等)	(60,000)	(46,250)
大会開催費 (シンポジウム含)	小計	74,000	171,610
	報告集印刷代等	(24,000)	(153,510)
	開催費 (茶菓子等) 礼金	(50,000)	(18,100)
事務費	小計	135,000	25,819
	人件費 (交通費含)	(120,000)	(20,384)
	事務用品費	(15,000)	(5,435)
通信郵送費	小計	170,000	166,320
	会報送料	(60,000)	(77,600)
	会誌等送料	(50,000)	(56,000)
	切手, その他	(60,000)	(32,720)
I F C S 運営分担金		30,000	21,310
予備費		230,399	32,285
計		1,069,399	690,394

収支差額

収入(997,767) - 支出 (690,394) = 差額 (307,373)

差額内訳 307,373 円

(銀行口座 275,297円)
(郵便振替口座 500円)
(現金 31,576円)

この差額を次年度繰越金とする。

監査の結果、上記の通り相違ないことを証します。

平成13年

6月7日

辻本 英夫

土井 聖陽



平成13年度予算書

収入の部

科目	細目	予算額 (単位円)
前年度繰越金		307,373
会費収入	平成13年度分正会員 平成13年度分賛助会員 平成12年度までの未納金 新入会員 新入会員 入会金	602,000 (324,000) (120,000) (108,000) (30,000) (20,000)
雑収入	予稿集売り上げ 大会・研究報告会参加費 (報告集代金を含む) その他 広告掲載料	95,000 (10,000) (60,000) (25,000)
計		1,004,373

(注) 会費収入は次のようにして算出した (平成13年4月1日現在)。

平成12年度分会費

正会員	180人×3,000円×0.6＝	324,000円
賛助会員	4口×30,000円＝	120,000円

未納会費

平成12年度までの未納分 (延べ人数)

正会員	180人×3,000円×0.2＝	108,000円
-----	------------------	----------

新入会員

入会費	10人×2,000円＝	20,000円
年会費	10人×3,000円＝	30,000円

支出の部

科目	細目	予算額 (単位円)
経常運営関係費	会報印刷代 (JCS会報) 会報印刷代 (IFCS会報) 連絡用印刷費 (葉書等)	260,000 (160,000) (70,000) (30,000)
大会開催費 (研究報告会、共催 シンポジウム含)	報告集印刷代等 開催費 (茶菓子等)	170,000 (150,000) (20,000)
事務費	人件費 (交通費含) 事務用品費	135,000 (120,000) (15,000)
通信郵送費	会報送料 会誌等送料 切手、その他	180,000 (80,000) (60,000) (40,000)
IFCS運営分担金		30,000
予備費		229,373
計		1,004,373

研究報告会記録

第18回研究報告会

日時：2001年12月22日(土) 10:00～17:00

会場：統計数理研究所講堂

出席者：会員29名、非会員20名

市野 学氏(東京電機大学)、清水 信夫氏(統計数理研究所)に特別講演をお願いした。また11件の一般発表があり、活発かつ有意義な討論が行われた。

特別講演

シンボリック・データ解析

市野 学(東京電機大学理工学部情報社会学科)

This paper presents a region-based fuzzy pattern classifier that is applicable to symbolic data. In Symbolic data, each sample pattern is described not only by quantitative features but also by qualitative features. To manipulate these general forms of sample patterns, we introduce a mathematical model so called the Cartesian system model (CSM). Then, we define the mutual neighborhood graph (MNG) as a tool to know the structures between pattern classes. Our region-based fuzzy classifier is designed based on the MNG. We present several numerical examples in order to show the effectiveness of our approach.

SODAS: Symbolic Official Data Analysis System - シンボリック・データ解析のためのソフトウェア -

清水 信夫(統計数理研究所調査実験解析研究系)

様々な形態の統計データを一般化して記述するための概念の一つとしてシンボリック・データ(Symbolic Data)が提案されている。これにより、大きなデータ集合をより小さなデータ表(シンボリック・データ表)に要約して記述できる。また、そのように要約されたデータ表における各個体の数学的表現はシンボリック・オブジェクトと呼ばれる。これらのデータ表およびオブジェクトの統計的な解析はシンボリック・データ解析(Symbolic Data Analysis, SDA)と呼ばれ、様々な既存の統計手法の解析対象をシンボリック・データにも拡張したものととして広く研究が進められている。

本講演では、そのようなシンボリック・データ解析を計算機上で行うためのソフトウェアであるSODAS(Symbolic Official Data Analysis System)について、インストール方法を含めた基本的な使い方および特徴を紹介する。

一般発表

3次元空間(乱流現象)

近藤 明良(拓殖大学)

There are 14 imaginary spheres on the Earth. The imaginary sphere will be considered in the following. Consideration is limited to one 14 spheres that exist. Of course, the size of the imaginary sphere is assumed to be the same as that of the Earth. Thus, a regular hexahedron inscribes the sphere in the interior. Due to change in the regular hexahedron, and due to the rotation of the Earth and various other Phenomena, it is considered that various events arise also on the imaginary. The Earth is thought to move 499 meters per second.

‘Turbulence’ is the phenomenon that has a scale comparable to human beings so that it has both deterministic aspect and random aspect.

リハビリテーション医学における障害分類の構造把握 - 人工股関節置換術前後の障害像を元にして -

清水 和彦(北里大学医療衛生学部)

変形性股関節症の人工股関節置換術前後の患者284例を対象としてJOA HIP score(score)の各項目、股関節筋力、SF-36の評価を行った。scoreの信頼性、因子分析による構成概念妥当性を確認し、構造方程式モデリング(SEM)によって障害の構造を把握した。

scoreの標準化後の係数は0.8以上を示し、構成概念妥当性も確保されていた。「術側機能」「非術側機能」「能力障害」「身体健康面」「精神的健康面」の5潜在変数を想定したSEMの結果、身体健康面53%、精神的健康面49%、また能力障害は機能障害によって63%説明された。Scoreは疾患特異性を持つバッテリーであること、障害の階層性の仮説を支持しうるものといえた。

嗜好品とストレスの関係の日米比較

松木 修平((財)たばこ総合研究センター)

嗜好品4品目(コーヒー、紅茶、アルコール飲料、たばこ)のストレス解消効果(意識)・摂取状況(行動)と仕事ストレスとの関係を日米間で比較・検討した。その結果、アメリカでは仕事ストレス度の高い人には社会的地位(学歴、職業、世帯年収を指標とする)の高い人が多く、そうした人々は、健康有害意識の高いコーヒーの飲用を控え、また教養がないと思われることを恐れて喫煙しない可能性が示唆された。

データの科学と統計学・データ解析・分類の方法

林 知己夫(統計数理研究所名誉教授)

Data design, data collection and data quality evaluation are crucial to data analysis if we are to draw out useful

relevant information. Analysis of low-information data never bears fruit; however, data analytic methods can be refined. In spite of the importance of this issue in actual data mining and data analysis, I am forced to ask why these problems cannot be discussed at its most essential level. Perhaps it is a matter of the laborious practical work involved or the otherwise plodding pace of research. Indeed, these problems are rarely addressed because in academic circles it is regarded as unsophisticated. In the present talk, I dare to touch these problems with the fundamental concept of data science.

疲労感に関する自由回答と項目反応

土井 聖陽 (大阪樟蔭女子大学短期大学)
大隅 昇 (統計数理研究所)

62名の男子大学生をサンプルとしてストレスと疲労感に関して、自由回答と質問紙を実施した。自由回答から得られた語は、「疲労」、「フラストレーション」、「攻撃性」などに分類された。「疲労」を表わした語の幾つかは、疲労を測定する質問項目と同じ言葉であった。しかしながら、両者の間の 自乗値は有意ではなかった。さらに、「攻撃性」に関する語と攻撃性を測定する項目の表現は異なっていた。

教員志望学生の教育評価観・道徳観

吉村 宰 (岡山大学教育学部)

教員志望学生の教育評価観・道徳観及び彼らの自己概念を調査した。

教育評価観、道徳観についての自由記述回答を分析し、1)多くの学生が考える教育評価の現状とあるべき姿の間にはズレがあるにも関わらず、過去に受けてきた評価には満足している、2)道徳は心の問題であり、家族や友人等自分を中心とした狭い世界観を有しているようである、などを明らかにした。また、自己概念については、自己決定感、自尊感情、能力に関する効力感が比較的高いにも関わらず、不安を感じやすい傾向にあることを示した。これらの結果を教員養成の課題との関連で考察した。

女性の自立意識 - '96年調査、'01年調査の比較をふまえて -

高倉 節子 (長崎純心大学)

村田 磨理子 ((財)統計情報研究開発センター)

女性の自立意識について、1994年、2001年と2回の調査を行った。調査対象は、4大8校、短大5校、'58、'67、'75、'81、'86、'91、これに'01調査では、'98を加えた年度的女性卒業生であり、'94調査では、3023人、'01調査では、2500人を被調査者とし、それぞれ、1407、866の有効回答を得た。調査項目は、

自立のイメージ、自立の要素・意欲・阻害要因、家族における役割意識、その他、個人的要因、社会意識などである。調査結果を分析し、経済的自立の他に、精神的自立にも重点が置かれていること、2回の調査結果は極めて類似であるが、自立意識は多少強くなった事、そして、男女についての平等性の意識がやや高くなったことなどが示された。そして、自由回答の2、3の質問に関しては、'01年の調査では、回答文がいずれも短くなっている。このことは、人々が、自立に関して、割り切って考えるようになったのではないかと考えられる。

双対尺度法と入れ替えのアルゴリズムによる分類

中村 好宏 (統計数理研究所)
馬場 康維 (統計数理研究所)

質的データの解析において、変数もしくは個体の分割を必要がある場合がある。既存の質的データの解析法ではデータ構造の記述は行っても、個体または変数の分割を与えることは出来ない。

本報告では、双対尺度法と入れ替えのアルゴリズムを組み合わせた分類法を提案する。この手法は双対尺度法における等価分割の原理を基にしている。さらにこの分類法を実データに適用した例を示す。

観測値の精度を考慮した回帰分析

馬場 恵美子 (日本大学理工学部数学科)
馬場 康維 (統計数理研究所)

In ordinal regression analysis observed values of explanatory variables and criteria variables are considered as points. However we need to note that the points given by observation include some errors and the points given as averages are not true points. In this paper we discussed the following cases.

- 1) Regression analysis in the case that observed points are given as averages.
- 2) Regression analysis in the case that observation has errors. In the latter case it was shown that if observation errors of a criteria variable and explanatory variables are independent then the procedure of parameter estimation of a regression plane reduces to ordinal one but it is different for polynomial regression.

Fuzzy Cluster Loadings for Weighted Regression Analysis

佐藤 美佳 (筑波大学社会工学系)

ファジィクラスタリングは、現実の世界で得られる複雑なデータの状態を表現できるメリットがある。しかし、そのため、結果の解釈の困難性が従来より指摘されていた。

この問題を解決するために、ファジィクラスターの解釈を行うファジィクラスター負荷量モデルを提案する。このモデルと重み付き重回帰分析との関連性から、ファジィクラスター負荷量の推定は、重み付き重回帰分析における回帰係数の推定問題として検討できる。

さらに、データが3元データである場合、二つの拡張したモデルを示す。いくつかの数値例によりこれらのモデルの妥当性を検討する。

自律的クラスタリング手法の有効性について

佐藤 義治（北海道大学大学院工学研究科）

本論文は自律的クラスタリング手法において、クラスターの形成される過程について具体的な例に基づき考察したものである。一定間隔の格子状に配置された点において、アクションルールの異なる制御パラメータに対するクラスターの形成過程の相違点について検討した。その結果大きな特徴の一つとして、クラスターの融合は空間配置の周辺部から行われる傾向のあることが示された。これは平均の異なる正規乱数で与えられる2群のデータに対しても同様の傾向が見られた。さらに、制御パラメータを適当にとると2つのクラスターの中央に位置する点はどちらにも割り当てられず、孤立したクラスターを形成する傾向も見られた。これは従来のk-means法とは異なる性質であり、本手法の興味あるところである。また従来の手法と比較により制御パラメータの値を決定することなどが今後の課題である。

統計関連学会連合大会連絡委員会報告

昨年度の会報No.24に記しましたように、統計関連学会連合としての活動に日本分類学会も参加することを表明しています。具体的には2002年度の統計学関連3学会（日本統計学会、応用統計学会、日本計量生物学会）の連合大会開催がありますが、これについては、3学会連合大会の日程に合わせた活動を行うことを総会でもご承諾いただき、その後開催された連絡委員会および大会実行委員会には、会長または幹事長が引き続き出席してきました。本年度の分類学会年次計画では、このことを考慮して、9月の3学会連合大会に日程を合わせてシンポジウムを開催することが運営委員会で承認され、実行にむけて準備しています。なお、来年度以降の計画については、どう対応するか、流動的です。また、本年度のように日程と場所をそろえる3学会連合大会形式についての是非も含めて、統計関連学会の発展的な方向と対外的取り組みについて、論じられています。

以下に、これに関連した「第2回連絡委員会議事録」を、記録者から配信されたものを要約して掲載します。

統計関連学会連合大会第2回連絡委員会議事録（要約）

2001年9月2日(日)、西南学院大学における統計学会大会の日程中に連絡委員会があった。出席者は15名で、分類学会としては幹事長が出席した。協議されたのは次の点である。

1. 2003年度も2002年度と同様に連合大会とすること、時期は9月上旬、名古屋地区が候補にあった。日本行動計量学会へも打診する。
2. 2002年度連合大会の会計上の問題が検討された。特に、参加費（報告集代）の額、プログラム発送費用、大会開催準備金などについて、提案があり了承された。
3. 2002年度連合大会の企画については、各学会で例年通りオーガナイズドセッション・特別セッション等を企画し、連合大会プログラム編成委員会で合同の企画・市民講演会を含めた最終調整を行なうこととなった。
4. 次回連絡委員会はプログラム編成のめどがついた頃に召集する。

以上

なお、2002年度の3学会連合大会については、開催校の明星大学を中心にした「大会実行委員会」が発足し、これまで3回の会合が開かれて具体的な準備が進められています。分類学会としては、何らかの形で歩調を合わせるが、連合大会そのものへの参加はしないことにしており、これらの論議にはオブザーバーとして参加してきました。なおこの中で、市民講演会の企画に、分類学会へも後援の誘いがあったので、分類学会運営委員会で審議し、協力団体の一つとして参加することを決めました。また、連合大会の日程の翌日（9月11日）に、分類学会のシンポジウムを開くという形で連合大会に協力することも運営委員会の承諾を得ました（2002年度第1回運営委員会記録参照）。

2003年度も本年度と同じ3学会での連合大会が計画されており、行動計量学会など関連学会の参加を打診しているようですが、日本分類学会としては、今後も慎重に対応、検討することとしました。

このほか、統計関連学会連合については、日本学術会議の統計学研究連絡委員会でも論議されており、同委員会の吉村功委員長によるご提案と討議の結果報告は本会報に掲載のとおりです。なお、ご提案の趣旨他を巡っては関連学会からの各出席者から、以下の様な様々な意見が出されました。

- ・ 連合は日本の関連学会の情報の集積という意味で対外的に必要であるが、連合大会や学会誌の統合を行うといったことよりも、前向きな趣旨

でシステムとしての連合を考えるべきである。

- ・ 連合大会も数年に1回なら考えられるであろう。
- ・ シンポジウムなどを共同主催するという形式がよいかもしれない。
- ・ 欧文誌だけ統合を考えるのがよい。
- ・ 様々な統計関連学会は、今までの活動や設立時の経緯もあるので、それぞれの特徴は重視すべきである。

などです。関連学会連合に対して総論では賛成でも実際問題として検討すべき事項は多くあります。分類学会としては、単なる統合による事では統計学の発展に寄与しないと考え、協力できそうな事から、試行的に進めることとしました。こうしたことから、今年度の連合大会への協力も、同一会場への参加は無理であり、日程を調整した別会場でのシンポジウムという形での参加という形式を、一つの試みとして行うこととしました。科学研究費の分野編成における情報学と統計学の位置付け・関係など、看過できない大きな問題もあり、今後の方向についても、十分に考えておかなければなりません。(記事：林文幹事長)

関連学会活動

JCSでは、下記の市民講演会を協賛しています。

2002年度の統計関連学会連合大会における市民講演会

日 程：平成14年9月8日(日)

テーマ：ふるきをたずねて新しきを知る - 統計学で温故知新 -

講演者：村上 征勝(統計数理研究所)

竹田 正幸(九州大学大学院情報システム学研究院)

なお、連合大会の会場は、明星大学日野キャンパス大学会館

日 程：平成14年9月7日(土)～9月10日(火)

9月7日(土)はチュートリアルセミナー

[その他の学会]

各学会の活動状況は、ホームページをご覧ください。

日本統計学会 <http://www.jss.gr.jp/>

応用統計学会 <http://www.applstat.gr.jp/>

日本計算機統計学会 <http://www.jscs.or.jp/>

日本行動計量学会 <http://www.soc.nii.ac.jp/bsj/>

日本計量生物学会 <http://www.soc.nii.ac.jp/jbs/>

IFCS (国際分類学会連合) 関連

IFCS日程など

IFCS-2002大会は、2002年7月16日から19日にポーランドのCracowにおいて開催されます。JCSからも多くの参加者を予定しています。プログラムなどの最新情報は、<http://ifcs2002.ae.krakow.pl/>を確認してください。

IFCS TAP申請

IFCS2002の若手研究者のTAPについて、1名の申請がありました。申請者は清水信夫会員(統計数理研究所)です。大隅会長からTAP委員会議長(林知己夫)あてに申請しましたところ、本年4月20日付けで決定通知が来ました。受給者はJCSより1名のほか、CSNAより2名、SFCより1名、SISより2名、VOCより2名です。

日本学術会議関連報告

2001年10月と2002年3月に、第4部会員 統計学研究連絡委員会(統計研連)委員長 吉村 功先生からお寄せいただいた報告をそのまま掲載いたします。文中の所属や肩書きなどは、当時のものです。掲載が遅くなったことをお詫びします。

(1) 2001年10月18日付記事

はじめに

学術会議では、総会が年に2回開かれます。その際に、部会、連合部会、特別委員会などの会合も開かれます。今年度のその2回目が10月15日から18日にかけて開かれました。一般的なことは、学術会議のホームページに逐次掲載されていますので、興味のある方はそれを覗いて下さい。ここでは特に統計学関連学会の会員の皆さんに特にお伝えした方がよいと感じたものを、統計学研究連絡委員会の活動も絡めて、報告しておきます。

1. 知的所有権

データベースの作成にたいして、どの程度の保護と自由使用を認めるかが、国際的な議論となっています。報告によりますと、1990年頃からの検討を経て、欧州連合(EU)が、データベース作成の投資者保護のために「独自の権利(sui generis right、スーアイ・ジェネリス・ライトと発音するラテン語だそうです。)」を与える制度を導入するという政策判断をしました。独自の権利というのは、著作権よりゆるい条件、つまり、著作権ではそのデータベースに創作性があったときのみ権利が保護されるのにたいし、創作性がなくても著作権並みの保護を与えようということです。たとえば、ごく平凡な索引・検索のデ

データベースなどを公的資金で作ったときがこれに該当します。

これについて学会議は、「データベースに関して提案されている独自の権利 (sui generis right) についての見解」という声明を採択しました。このような権利は、学術研究におけるデータベースの自由な利用を脅かすものであるから反対である、ということです。投資に対する保護はいままで通り、著作権の範囲で行える、という主張です。

データベースについては制作者と利用者の両面を持っている統計家にとって、データベースがどの程度商品化されるべきか、大きな問題だと思えます。現実の法制度を間違いなく確かめた上で、ルールをどのように定めるか議論して下さい。

2. 日本の計画

日本が国際的に21世紀の学術をリードするには、日本の計画 (英語では「Japan perspective」でありながら、日本語の表題は「日本の計画」) を、世界に発信すべきである、ということで精力的な作文が進められています。

ヒューマンセキュリティの再構築、循環型社会、価値観の転換とライフスタイル、ジェンダー問題の多角的検討、生命科学の全体像と生命倫理、情報技術と経済・社会、教育体系の再構築、という7課題が焦点になっています。

1年後には大きな文書が採択されるでしょう。いずれも難しい問題であり、1年のパートタイム的作業で解決の方向が出るとは思えませんが、日本をリードしている60歳以上の方々がどのように考えているか、ということは表面化すると思えます。乞うご期待。

3. 科研費の分科・細目・キーワード

平成15年度 (来年秋の申請) の科研費補助金の分類が大幅に変わりそうです。科研費は、「系、部、分科、細目」という枝葉構造で整理されていますが、系を、「総合・新領域系」「人文社会系」「理工系」「生物系」に分け、今まで「複合領域」の分科だった「統計科学」が、「総合・新領域系」の分科「情報学」の一つの細目になりそうです。(「経済統計学」は人文社会系の第3部、「数学一般」は理工系の第4部です。) なりそうです、という言い方をするのは、イニシヤチブが文部科学省にあって、学会議は意見を自発的に述べるという立場にしかないためです。

これについて統計学研連は、メールを通して議論をしました。統計学研連は、学会議会員7人と、統計学関連学会からの委員7人とからなっています。後者の皆さんは、「統計科学」を今までどおり「分科」

として残すべきで、情報学の一部に組み込むということに反対、という主張をしていますが、前者の皆さんはこれに肯定的ではありません。現段階で、独立した分科を要求するにはそれだけの説得性のある理由が必要ですが、実際の「統計科学」の申請件数、そこで達成された成果が、説得性を持つだけの内容になっていないからです。「統計科学」の学問としての威力がそれほどでないことの反映ではないでしょうか。この点については、枠内に安住する統計科学ではなく、他分野から一目おかれる「統計科学」を目指していただきたいと思えます。

(2) 2002年3月8日付記事

第18期 (来年7月までの3年間) 学会議は、学術についての日本からの発信という趣旨で、「日本の計画 (Japan perspective)」の構想をまとめつつあります。また、「新しい学術の体系」を提起しようという作業も進めています。かなり長大な報告書が出ることになるでしょう。

それと平行して、学会議のあり方と自己評価のやり方なるものが、国立の大学や研究機関の「改革」との一環で、昨年来議論されています。National Academy としての終身会員制にしたらどうか、現在210名の会員を研連委員も含めた5000人くらいにしたらどうか、会合の成果、回数、出席率を自己評価したらどうか、等といった議論です。政府では「総合科学技術会議」を日本の学術政策の諮問組織としましたから、政治的には学会議に大きな役割を持たせないつもりのようなようです。このようなことは、学会議の広報誌「学術の動向」(日本学術協力財団 tel: 03-5410-0242) に折に触れ掲載されています。このような外局的なことはそちらに任せておいて、ここでは統計学研究者に関係の深いことを二つお知らせします。

1. 科研費についての変更

科研費の分科細目の変更が、「文部科学省の決定」ということで知らされました。前回も書きましたが、科研費補助金の「統計科学」は2003年度から、系が「総合・新領域系」、分野が「総合領域」、分科が「情報学」、細目が「統計科学」、細目番号が「1010」になります。関連するものでは、「経済統計学」が、「人文社会系」の「社会科学」の「経済学」の細目番号「3603」の細目となり、「数学一般」が、「理工系」の「数物系科学」の「数学」の細目番号「4103」の細目となります。今後は、審査員と申請がキーワード中心に分類されるとのことです。

このような分類の変更においては、申請件数の過去の実績が大きく影響しているとのこと。科研

費の総額はかなり大きいので、申請経験の少ない方は、「どうせ当たらない」と思わず、過去に科研費を受けた経験のある人に申請のコツを教えてもらって、申請をする習慣を付けてください。特に、若い方は優遇されています。挑戦精神を發揮してください。審査員の総数が、約3000人になりますので、学会の役員の方はいつか一度は審査委員になると思っていてください。ちなみに、審査員には63歳以下、という年齢制限があります。

2. 統計学の位置

上で述べた科研費の分類変更は、学術体系全体の中での統計学の位置づけについて、外部がどう評価しているか、ということの一つの現れです。外部からのこのような位置づけは、たとえば統計数理研究所の将来構想にも反映してくるでしょう。統計学・統計科学は独立した一つの細目ではあるが、それを情報学の一部と位置づけて良いのではないかと、というのが大きな流れとしての体制的な見方だと考えてください。自分は統計学・統計科学という分野で重要な仕事をしているという自負をお持ちの方は、このような位置づけを受け入れて然るべきかどうかという自問を行い、井戸の中、温室の中で悠々自適しているだけでなく、他の分野の人に自らの仕事の内容を提示し、外部評価を受けてみて下さい。

他の分野の方々との折衝や議論の中では、しばしば、統計学が非常に古いものとして受け取られていることを感じます。それは統計家が、新しさを他に感じさせていないことの現れではないかと思えます。

統計研連では、昨年10月、今年の1月、3月と会合を開き、関連学会の代表者の方に集まっていたりして、統計科学連合結成の可能性を議論しています。私はこれを、内部問題としてではなく、外部との関係において必要だと考えています。各学会においても、外部の他の分野あるいは体制の中で統計学・統計科学が存在を主張するためには連合が必要ではないか、という問題意識を持って「統計科学連合」という構想を検討していただきたいと思えます。

毎回言っていることですが、この報告は私が個人的に、統計関連学会の皆さんにお知らせした方がよいと感じているところだけを、主観的に書いているものです。問題の取捨選択が多少偏っているのはお許し下さい。

国際会議開催情報

ISMシンポジウム「環境科学と統計科学の新たな融合」

日 時：2002年8月19日（月）～20日（火）

会 場：統計数理研究所講堂

主 催：統計数理研究所

参加登録用アドレス：ismsympo-environ@ism.ac.jp

また、ISIのWebサイトに最新の国際会議情報が掲載されています。詳しくは、<http://www.cbs.nl/isi/calendar.htm>を参照ください。

August 24- 28, 2002, Berlin, Germany

Compstat2002

<http://www.compstat2002.de>

info@compstat2002.de

November 14-17, 2002, Charleston, South Carolina, USA

QDET: International Conference on Questionnaire Development, Evaluation, and Testing methods

<http://www.jpsm.umd.edu/qdet>

December 9-12, 2002, Maebashi TERRSA, Maebashi City, Japan

ICDM '02: The 2002 IEEE International Conference on Data Mining (Sponsored by the IEEE Computer Society)

Home Page: <http://kis.maebashi-it.ac.jp/icdm02>

Mirror Page: <http://www.wi-lab.com/icdm02>

事務局から

シンポジウム・総会のお知らせ

平成14年9月11日(水)に、多摩大学ルネッサンスセンター（渋谷マークシティ・ウェスト）において、シンポジウム「テキスト型データの解析を巡って」（仮題）を開催します。前記のとおり、統計関連学会連合大会（9月7日～10日）と時期を合わせてシンポジウムを開催することになったものです。

また、平成14年度通常総会も同日に行います。ここ数年は総会を12月の研究報告会の時に行ってきたが、時期が遅すぎ、不都合もありますので、9月に総会も行うことにしました。

なお、研究報告会は12月に行う予定です。

いずれも、詳細が決まり次第、ホームページなどに順次掲載していきます。

お詫び

この会報と併せてお送りしたIFCS Newsletter Number 23では、シンポジウムの会場を「東洋英和女学院大学大学院」とお知らせしましたが、「多摩大学ルネッサンスセンター」に変更となりました。

日本分類学会ホームページ

ホームページのURLは、<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcs/>です。研究会の予定などの掲載情報を広く募集しております。詳しくは事務局までご連絡ください。

なお、ホームページには、他の学会情報、検索の有用な情報取得先などへリンクが可能となっておりますので、ご利用ください。

報告集の頒布

上記第18回研究報告会の報告集の在庫がありますので、ご入用の方は事務局までお知らせください。1部1,500円で頒布いたします。この他の回およびシンポジウム予稿集につきましても若干の残部がありますので、お問い合わせください。

会報へ寄稿のお願い

今号に寄稿いただいた皆様には、紙面を借りて、お礼申し上げます。お忙しいところ、ありがとうございました。

JCS会報では、常時、会員の皆様の寄稿をお願いしております。国内外の学会に参加した際の印象記や研究会の予定など、会員に知らせたいことなど広く募集しております。詳しくは事務局までご連絡ください。電子メールでの寄稿を歓迎します。

会費納入のお願い

平成14年度会費納入のお願いをお送りしました。会費収入が見込みを下回る年度が続いておりますので、早めの納入へのご協力をお願いいたします。ご不明の点は、学会事務局までお問い合わせください。

IFCS論文集について

IFCS-93、IFCS-96、IFCS-98、IFCS-2000大会の論文集が発刊されておりますので、ご関心のある方は出版社までお問い合わせください。

New Approaches in Classification and Data Analysis (1994)

Proceedings for the IFCS-93, Paris, 1992.

Data Science, Classification and Related Methods (1998)

Proceedings for the IFCS-96, Kobe, 1996.

Advances in Data Science and Classification (1998)

Proceedings for the IFCS-98, Rome, 1998.

Data Analysis, Classification and Related Methods (2000)

Proceedings for the IFCS-2000, Namur, 2000.

なお、いずれの巻もSpringer-Verlagから出版されております。現時点での価格等につきましては、下記宛にお問い合わせください。

〒113-0033 東京都文京区本郷3-3-13

Springer-Verlag Tokyo (シュプリンガー・フェアラーク東京) 編集企画部、神原満季栄氏

E-mail : kambara@svt-ebs.co.jp

<学会問い合わせ先>

日本分類学会事務局

〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7

統計数理研究所気付

学会事務担当：林なおみ（原則として毎週月曜のみ）

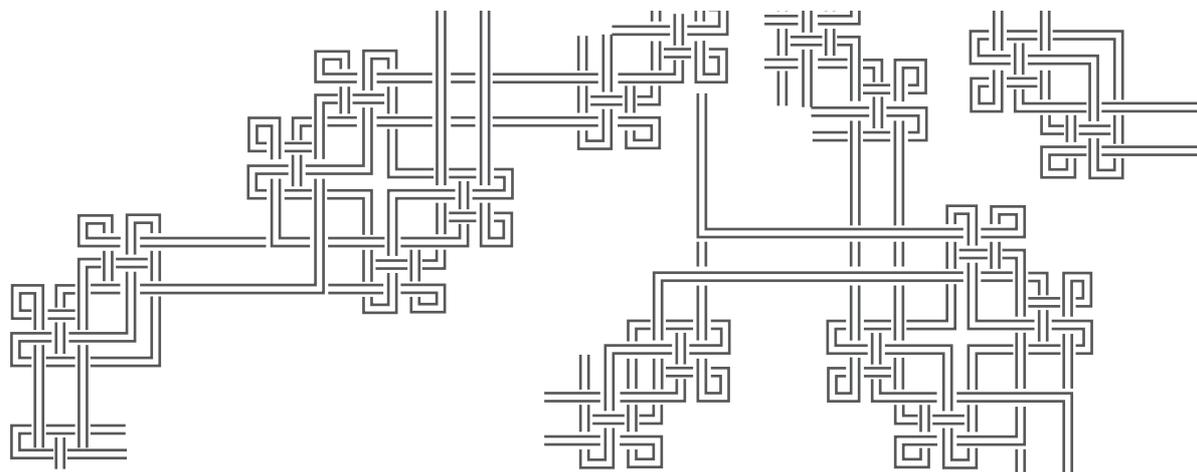
TEL : 03-5421-8741

FAX : 03-5421-8796（日本分類学会宛を明記のこと）

E-mail : HQJ11574@nifty.ne.jp（林文、幹事長）

MarikoMURATA@sinfonica.or.jp（村田磨理子、広報担当幹事）

ホームページURL : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcs/>

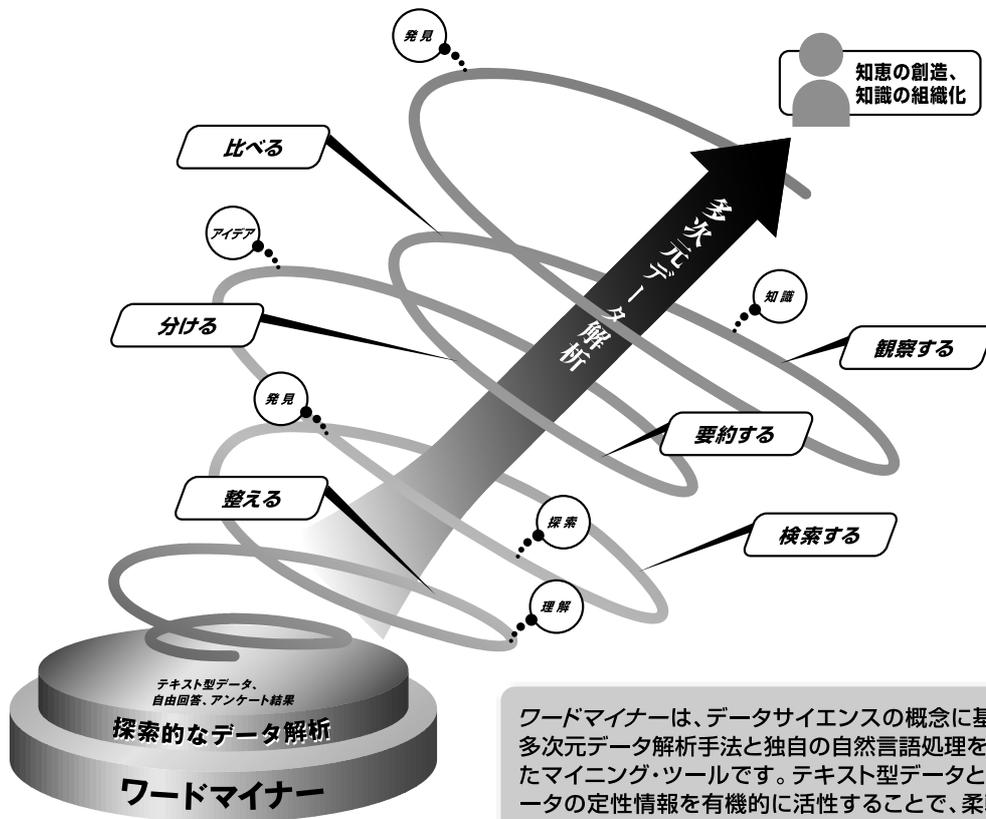


ワードマイナー

WordMiner®

待望のテキスト型データのマイニング・ツール登場

『ナマの声』や『文章』にひそむ、人の“こころ”を探り出す!



ワードマイナーは、データサイエンスの概念に基づき、多次元データ解析手法と独自の自然言語処理を統合したマイニング・ツールです。テキスト型データと質型データの定性情報を有機的に活性することで、柔軟かつ探索的に多次元データ解析が展開できます。ワードマイナーは、あらゆる分野において論理的な筋道を立てながら、知識組織化や知恵の創造を総合的に支援します。

価格：30万円(一般) / 15万円(アカデミック)

開発グループ

大隅 昇(統計数理研究所教授) / テキストマイニング研究会 / (株) 平和情報センター / 日本電子計算(株)

お問い合わせ先

日本電子計算株式会社 ビジネスソリューション事業部 〒135-8388 東京都江東区東陽2-4-24

TEL:03-5690-3203 FAX:03-5690-3243 URL:準備中 E-mail:準備中